

メールレター(41)

母の日サプライズ

戻り雪かしら？ 季節はずれの大雪に街の風景が白く染まったのは、5月も中旬になるうかという頃。春は歩みを止め、進む気がないようです。少しだけ緑になったというのに、巷の動きに合わせて、木の葉まで自主隔離のようです。出てきません。

「母の日の花を贈りたいの。1日早く、土曜日に着くと思うわ。いつも色々ありがとう。」娘からそんな嬉しい連絡が、週の半ばにはいりました。いつもなら、ドリトル先生が娘とマダム田中をレストランに招待して、母の日のお祝いをするのですが、今年はコロナウィルスで、レストランは閉まり、自主隔離で誰も家から出られません。

「嬉しいわ。楽しみにしてるわ。」

さて、当日。花屋は、自主隔離でも閉店していないので、母の日のプレゼントの注文が殺到したのか、大忙しのようです。通常でも、花屋は、この時期、母の日のプレゼントで、年収の半分を稼ぎ出します。増して、今年は、コロナ事情でレストランや他の店が閉まり、注文が増え、大変な忙しさのようです。

さてよ、ちょっと心配。宅配は、建物への訪問者禁止令が出て以来、接触を避けるため、各アパートまでは届けず、玄関ロビーに、ここかしこにぞんざいに置いていってしまいます。しかも山積みになっています。大事な花をそんな目に合わせるわけにはいきません、マダム田中は土曜日は、6階のアパートと玄関を行ったり来たりして様子を見ることになったのです。インターフォンが鳴りました。

「お花を届けに来ました。」

「わあ～ありがとう。玄関の前で待っててください」

ドリトル先生の剣道の生徒で、素敵な花屋をしているSさんが、届けに来てくれました。玄関の前に置き、

「こんにちわ。お届けものです。」 近づけないので、遠くから、

「ありがとう、」

それしか言えないのです。花をしっかりと抱えてアパートに戻った5分後にまた電話が鳴り、

「マダム田中は、お花のお届けものです。」

「えっもう一つあるのかしら。それとも忘れ物？」

降りてみると、ぞんざいに置かれたそれらしきボックスが一つ。贈り届けた人は見知らぬ人でした。

「どうしたことかしら、二つ？」

マダム田中は首をかしげるばかりです。ドリトル先生は、早速、最初の花の写真をとり、娘に送って、

「綺麗だね。Sさんがもってきたよ。ママ嬉しそうだよ。」

「パパ、ちょっと、待って。私のはオレンジ色でないし、鉢植えでもないのよ。それって、Sさん個人のプレゼントかも。。」

ふたつ目のプレゼントはピンクを基調にした、2-3種類の花を混ぜた、かわいい花束でした。娘のお祝いのカードがついていました。そういえば、花屋のSさんは、時折花を持ってきてくれたりします。予期せぬ心使いかも。。。ドリトル先生は、君の心配りを感謝してるよ、素敵なお花をありがとう、とメールをSさんに配信しました。Sさんは、

「気に入って下さり、とても嬉しいです。でも、これは僕からではないのです。フレデリクトンに住む、ロイック(義理の次男)からなのです」

そんなことってあるのかしら。。。一言も言ってなかったのに。義理の次男が、ど田舎のフレデリクトンに移って2年が経とうとしています。フレデリクトンのあるニューブランズウィック州は、コロナウィルスで死者が出ず、感染者も少なかったため、一足早く自主隔離は解除されたのですが、安全の為州境は固く閉ざされたままです。しばらくは会えないかもしれない、そんな切なさを感じる一鉢の義理の母親へのプレゼント。控え目な、この人らしい、暖かさを感じる心使いです。義理の長男ですか?? 当日、お祝いのテレ電話がきました。これも、この人らしい、合理的なお祝いです。 コロナウィルスで遠くなってしまった家族の距離は、心使いで縮まるのかもしれない。

コロナウィルスは、様々な思いを残してもいきます。先週、生花の生徒でもある、長年の友人は、血液癌(白血病でしょうか。)でご主人をなくしました。5年前に発癌し、回復し、以前の暮らしに戻って3年が経ちましたが、一年前に再発し輸血も効かなくなり、緊急入院して、あっという間になくなってしまいました。傍についていられただけでも幸せだったような気がする。友人の電話がきました。折しも、コロナウィルスで混沌とした状況のため、遺体の引き取りも、法的な手続きも葬式もめどが立たないと嘆いていました。

ご主人は、教育者一家に生まれ育った穏やかな教育者で、娘も孫も教育者です。私の友人は、敬虔なカトリックで、社会のためにボランティアで貢献してきました。銀行の相談委員会の会長を長く務め、銀行の利益を市民に還元する手伝いをしてきました。設置した保育所も20軒は超えるでしょう。保育所付きの中、高等学校も作り上げ、14~15歳のシングルマザーが子育てをしながら、学校を終えられるようにしたこともありました。大学に進みたければ奨学金も出すようにしたようです。

「親にも捨てられた14~15歳の子供でも、自分の子供は生きがいなのよ。奪うより、一緒に暮らす方法を見つけてあげたかったのよ。立派に育て上げ、勉強し、弁護士になった子もいるのよ。」

そんな友人も50年以上連れ添った伴侶の病いは辛かったようです。

「この間のお稽古の木の枝ね、芽がでたのよ。今、祈っているの、彼のために」

「庭の花も咲き始めたわ。今祈っているのよ、彼のために。」

「今、外にでられないでしょう。家の中で彼とピクニックすることにしたの。プランをおくるわね。ここの椅子は、公園のベンチよ、ここでワインを一杯。ここのキッチンのカウンターは、バーのカウンターよ、ここでワインを一杯。ここの鉢植えの所は、公園の木陰よ。ここでワインを一杯。あー歩き疲れたわ。」

こんなメッセージが頻繁に来ればくるほど辛さが積もっていったようです。

こんな中でも母の日は来たのではないのでしょうか。